

美しき
出会い

回想の十八人

石垣綾子著

美しき 出会い

回想の十八人

石垣綾子著

石垣綾子 いしがき あやこ
1903年東京生まれ，26年渡米，51年帰国
評論家。『回想のスメドレー』『さらばわ
がアメリカ』『スペインに死す』『我が愛
——流れと足跡』など著書多数。

美しき出会い—回想の18人

1983年11月25日 第1刷発行

定価 1300円

著 者 石垣綾子

発行者 今田喬士

発行所 株式会社 ドメス出版

東京都豊島区駒込1—3—15

振替 東京 8-48766

電話 03-944-5651

印刷所 株式会社 太平印刷社

製本／明光社

落丁・乱丁の場合はおとりかえいたします

©石垣綾子 Printed in Japan 1983

美しき出会い——回想の18人・もくじ

島野初子——分かち合う青春 5

羽仁もと子——「自由学園」から得たもの 17

鈴木茂三郎——優しい“金さん” 25

国吉康雄——アメリカの大地に花ひらく 35

大山郁夫——時代を予見する眼 53

佐野碩——ある亡命者の軌跡 61

隣の老画家——摩天楼のかげに 85

パール・バック——アジアへのまなざし

95

老 舍——アメリカにいたころ

111

エドガー・スノー——雪のニュー・イヤーズ・イヴ

123

ジャック白井——オリブの墓標

139

野村平爾——返せなかった借金

149

ハーバート・ノーマン——無念の死

155

李徳全——紅葉に想いを映す

161

大宅壮一——金の上に銅めつき

171

ローゼンバークの遺児たち——ジーンズの大学教授

175

辻一——ペン描きの投げキッス

183

アグネス・スメドレー——愛と解放の灯

189

あとがき

207

装幀 栗津 潔

島野初子——分かち合う青春



1983年6月，島野さん宅で

反逆の青春群像

東京の早稲田南町から神楽坂にかけての一带は、私にとって忘れがたい街である。明治の幼少時代から、模索の青春をすごした大正時代の記憶は、この街と結びついている。心象に刻みこまれた風景はところどころぼやけてもどかしいところもあるが、矢来坂下の天神町七九番地の一角だけは、奇妙なあざやかさで浮かびあがってくる。

ここに住んでいたのは、今は島野姓の矢部初子^{ハヤシノハツコ}さんで、彼女は若い日の私とは切り離すことのできない友人である。津田英学塾を卒業した初子さんは、雑誌の編集や翻訳、また英語の個人教授もしていた。そこへ習いに行った自由学園のクラスメートの岡村寿子さん（のちの村山知義夫人）が、

「一風変わったおもしろいひとで、綾子さんにびったりだと思うの」

と引き合わせてくれたのであった。

私より八歳年上の初子さんは、早く父を失って苦勞してきたせいか、人間的に練れていた。他人の気持ちをよくみとって手をさしのべる温かさがある。小柄で、目鼻立ちがととのつているというのではないが、きりつとした表情は不思議な魅力にあふれていた。この人柄にひかれて、母親しげさんとの二人住まいの家は、当時の反逆的な若者たちの溜まり場であった。私は新しい世界に刺激され、目を開かれて、ここに毎日のように入りびったものである。

表戸の格子をあけると片隅の井戸端でお米をとぐお母さんの笑顔にまず迎えられる。小ぢんまりした三部屋の家で、玄関の三畳に続く六畳があり、隣の八畳が初子さんの居間であった。そこは草花の咲く中庭に面している。立ち木の向こうに四畳半と八畳の別棟が建っていて、学生を下宿させていた。そのころは東大新人会の学生林房雄、是枝恭二、村尾薩男の三人が泊まっていた。

自然に若い女性も大勢集まってくる。東京女子大きつての才媛だった渡辺多恵子さんはそのひとりであった。のちに彼女は志賀義雄と結婚することになるが、新人会の学生たちの憧れの的だった。彼女が来ると、初子さんは八畳の居間から別棟に声をかける。

「こっちへ遊びにいらっしやい」

庭げたをつっかけて最初に顔を出すのは、いつも林房雄である。当時の彼はロマンティックな

左翼の闘士で、威勢のいい革命論をぶつのだった。ロシア革命に刺激されて、若い私たちの心は燃えていた。アナ・ボル論争から恋愛の謳歌となり、セックスの話へと、青春の鬱憤を吐き出して、にぎやかだった。

「今日は大盤振舞いするわ」

と初子さんは戸棚からウイスキーのびんを取り出した。手弁当で左翼系の集会に話をしに行く彼女が、お礼にもらったのだという。私たちは生のままコップで飲み始めた。初めて喉もとを通る琥珀の液体は、私の胸をカッと熱くした。

いつもは話し疲れるとみんなで神楽坂へくり出し、常連の文士たちの集まるカフェ・プラタンに寄って、ワインを一杯二杯、ちびりちびりとやっていい気分になるのだった。それが飲みなれないウイスキーをあおって、ほろ酔い気分をはるかに超えている。

「なに、日本を脱出したいって、それならソ連へ行きたまえ」

気炎をあげる私の言葉に林房雄がけしかけた。焦燥感にかられていた私は、どこの国でもいいから広い世界に飛び出してゆきたかった。

「そんなの簡単さ。上海まで行って、あとは地下組織の手づるをつかめばいいんだよ」

是枝さんもかたわらから言葉を添えた。上海は当時日本の内地みたいで、だれでも自由に渡航でき、定期便が一週に何度も通っていた。そこまでの旅費がありさえすれば心配はないという。

「問題はきみの決心ひとつだね」

おだてに乗って、ソ連行きを夢みる私は、手持ちの着物を売り払って、旅費にあてるつもりになった。

「そんなとき、役に立つ仲間の古着屋さんを知ってるわ」

と初子さんまでが本気でその人に連絡すると言う。ウイスキーびんは空になった。寮生活の多恵子さんは、いつの間にかいなくなっていた。居残った三、四人は酔いが回って足もとがふらふらしている。

「今夜はここでご寝しよう」

林房雄の提案で、初子さんの押し入れからありったけの夜具を引きずり出して八畳に敷きつめ、ごろ寝で一夜をすごした。翌朝、私のスカートはあわれにもよれよれになっていた。数日後に着物は売り払ったが、ソ連行きは夢のままに終わったのは言うまでもない。

三〇分間の国際婦人デー

初子さんは山梨県の宿場町で旅館を営んでいた矢部国太郎の次女で、一八九五（明治二八）年に生まれている。交通の発達で宿場町もすたれ、田舎の生活に見切りをつけて、一家が東京へ来たのは、初子さんが小学二年の時であった。父は文人氣質の趣味豊かな自由人であったらしい。そ

うした環境に育った彼女は、平塚らいてうの新婦人協会で市川房枝らと活動したこともあるが、私を知り合ったころは堺（のち近藤）真柄さんと親しく、赤瀾会の運動にかかわっていた。

「女が自立を求めれば必然的に古い家族制度と衝突する。それとたたかうための思想を持つことが必要になり、そこから社会主義に結びつくことになる」——こうした考えから、彼女は社会主義思想に近づいたのだった。運動をする人たちの衣食の世話をし、逮捕されて釈放された者の身柄引き受け人にもなる。いつも目立たない裏方の役目を積極的に買って出るひとだった。

一九二三（大正一二）年三月八日、日本で初めて国際婦人デーの会合が開かれたが、この時も初子さんは準備にほとんど一人でかけずり回っている。親しかった青野季吉、金子洋文など「種蒔く人」の同人たちを動かして、かげの力になってもらい、講師の交渉にもあたり、開会のあいさつだけはしかたなく自分がやることにした。最後に残った難題は、当日の会場費として払う百円の大金であった。幸いにも有島武郎が「自分の名前は出さないように」という条件で、初子さんの願いを聞き入れて出してくれた。

その日、午後七時の開会に先だって、私は、会場の神田美土代町の基督教青年会館の前で、道行く人にピラを手渡し参加を呼びかけた。一九歳の私にできる精いっぱい支援であった。配り終えて場内に入ると、二階までぎっしり埋まっている。ただ不思議に女性の顔は少なく、大部分が男性で、学生やサラリーマンらしく、インパネスにソフト帽が目立った。前日の新聞が、珍し

い女の集まりとして大きく取り上げたせいもあって、好奇心旺盛な男性をひきつけたのかもしれない。

この夜の雰囲気伝える古ぼけた一枚の写真を、ずっと後に初子さんから見せられたことがある。神田の古本屋の軒先にぶら下がっていたという。開会のあいさつをしている初子さんは、縞銘仙の着物に丈の長い羽織を着て、あごを少し突き出し、前席の男たちが身を乗り出して聞き入っている。薄れていた私の記憶がありありとよみがえってきた。

女医の佐々木晴子さんが、金子ひろ子という名で「婦人の職業生活の可否」と題して話している時に、ひと騒動持ち上がった。晴子さんは天神町に集まる仲間のひとりで、ふだんから話の上手なひとだった。働く女性の窮状を訴えると、場内はしんとして耳を傾けていたが、話がソ連の女性のことに移ったとたんに、

「ウソつけ！」

「女を共有しているじゃないか」

と罵声がとんだ。聴衆にまぎれこんでいた右翼の赤化防止団だった。この会のぶちこわしをねらっていたのである。彼らは隠し持っていたピラをまき散らし、場内は騒然として総立ちになった。

つめかけていた監視の警官隊はこの好機を待っていたかのように、

「解散！ 解散！」

とどなりちらして聴衆をつきとばし、会場の外に押し出した。抵抗すれば容赦なく逮捕される。初の国際婦人デーは三〇分余りでぶちこわされてしまったが、そのあと、初子さんのもとにたくさんのお励の手紙が寄せられ、婦人運動史に残る集会となった。私にとっても、端役ではあったが、初の活動の経験であった。

関東大震災はこの日から六か月のちの九月一日である。その混乱のさなか、労働組合指導者の虐殺、在日朝鮮人狩り、大杉栄・伊藤野枝とその甥の橘少年の扼殺等々、多くの生命が闇に葬り去られた。初子さんもこの時、麹町憲兵隊に検束されている。天神町の家に、大杉栄を死に追いかんだ甘粕憲兵大尉が部下を引き連れてのりこんできたのは、九月一七日の朝だった。初子さんは震災後初めて売り出された菓子を買いに出了た時、後ろから呼びとめられ、「ちよつと聞きたいことがある」と言つて家に連れ戻された。玄関には憲兵の長靴が五、六足脱ぎすてである。彼らは家宅搜索して、めぼしい手紙や名刺、アドレス帳を押収し、初子さんをむりやりに憲兵隊の車に押しこんだ。母親しげさんの涙にぬれた顔をあとに、連れて行かれたのは、大杉たちの殺された麹町憲兵隊。入れかわり立ちかわりの尋問に、初子さんは必死の思いで、

「生理だから帰してほしい」

の一点張り。おそろしくむし暑い日だった。その夜おそく帰宅を許され、危ういところを助か

っている。

奥むめおさんを助けて

初子さんを通して知り合った奥むめおさんは、「職業婦人社」を経営して『婦人と労働』という雑誌を発行していた。乳飲み子をかかえる彼女は、いつも子どもを背中にくくりつけて、女性解放の集会にも出席する。赤ん坊は人ごみになれてみるとみえて泣きもしなかった。「職業婦人社」の事務所をかねる巢鴨のとげぬき地蔵近くのお宅に行くと、軒先におしめが干してあり、部屋の中には洗濯ものが山のように積まれている。その中で、むめおさんは原稿を書いたり雑誌の編集をしていた。

そんなむめおさんを黙ってみていられない初子さんは、手助けしましょうよ、と私を誘った。自由学園を卒業して早稲田大学の聴講生だった私は、行く手をどう切りひらいたらいいか迷っていたときで、自由な時間はたつぷりあった。雑誌の維持会員を募るために、初子さんと私は毎日のように著名人の自宅回りをした。広津和郎、藤森成吉、秋田雨雀、小川未明、神近市子、久米正雄、佐藤春夫など。本郷の菊富士ホテルに住む宇野浩二が、縞のふとんを敷いた上で腹ばいで原稿を書いている部屋にも、また、田端の芥川龍之介が、面会日に入れかわり立ちかわりの訪問客を迎える二階の書斎にも上がりこんだ。前ぶれもなく押しかける私たちだったが、部屋の中に

招じ入れられ、三〇分、一時間と時間をさいて興味深げに話を聞いてくれる。帰りぎわには、

「まあ、しっかりやりたまえ」

と一円の維持費を渡してくれるのだった。

「あのころは女にとって活動がしやすかったのね。みんな好意的で励ましてくれたもの。今のしつかりした若い女性なら、もっと大きな仕事をやったでしょうに——」

と初子さんは当時を述懐していたが、たしかに大正のあのころは、めざめゆく女性を励ます熱意と支援をいたる所で受けることができた。

ごく最近、健康をすっかり回復して、消費者運動の現役にもどった奥むめおさんを主婦会館にたずねて『婦人と労働』のバックナンバーを見せていただいた。創刊されたのは一九二三（大正一二）年六月一日で、この第一号は初子さんが編集している。この号だけは婦選会館に収められているが、奥むめお編集の第二号以後は主婦会館に全部そろえてある。二年後には『婦人運動』と改題され、レベルの高い婦人雑誌として、一九三九（昭和一四）年まで続いている。私が手伝ったのは『婦人と労働』のころだった。

八八年の生涯を貧しい母親の解放に打ちこんできたむめおさんは、びっくりするほど張りつやのある顔で、思い出を語ってくれた。

「親しかった大杉栄がフランスから持ち帰った大きな乳母車を、私の赤ん坊にとゆずられたの